

Pauline Perdrau, RSCJ (1815~1895 年)

1815年4月20日フランス Angers で生まれた。父は貧しい人々のために尽くし尊敬された医者で、母はフランス革命の困難を耐え忍んだ気丈な女性だった。姉は医者と結婚し、5つ年下の弟 Jeseph は後に司祭になった。

Pauline の聖母への愛は、信仰厚い乳母 Jacqueline の影響によるものが大きい。Jacquine は、Pauline に毎日糸紡ぎの手仕事をさせたが、じっとしていることができず、糸は途切れがちで嫌になり、放り出して遊びに行ってしまった。Jacquine はそんな Pauline に、「神殿のマリア様を見習ってははどうでしょう。マリア様はあなたと同じ年頃で、どんなに美しく目のそろった織物を織ったか、想像してごらんなさい。マリア様の織物は厚かったり薄かったりすることがなく、その心はいつも穏やかで素直だったのですよ。」後年、Pauline はそのイメージがどのように自分の心にとどまった語っている。



感ずべき御母のバラ色のドレスは Pauline が子どもの頃持っていた、お気に入りのドレスがイメージとなっている。Pauline はそのドレスがご自慢だったが、乳母 Joseph は、Pauline の虚栄の傾きを感じ取り、美しいドレスを持っていない貧しい人々は、それをもっている人たちと同様に神を喜ばせているのだと伝えたという。Pauline は、聖木曜日に聖体訪問のために修道院に行ったとき、バラ色のドレス着て修道女たちに可愛がられ、大事にされて見せて回った後、修道女の一人から「あなたは私たちと一緒にとどまって、小さな修道女になりたくありませんか？」と聞かれたとき「はい。」と答えました。「いつかそうなるでしょう。その場合には、あなたはその美しいドレスを捨てなくてはなりませんよ。」と言われたとき、ドレスに目を止め、溜息とともにきっぱりと言った。「いいです。わたしはそれを捨てましょう。」と答えた。Pauline は 10 才で初聖体と堅信を受け、12 才のころ修道女になろうと思った。それから Pauline は聖体拝領の数を書き留める習慣を始め、臨終の聖体拝領は、18,950 回目となった。

Pauline はパリの学校で教育を受け、優秀な成績を修めたが、特に絵画に興味を持ち、日常のちょっとした風刺やスケッチなどをおどけて描いて、仲間を楽しませていた。彼女の才能に気づいた絵画の先生の勧めで、16 才で学校を卒業後、

絵画を学ぶことになった。1, 2年後には既に肖像画や絵画の注文を受け、かなりの額の収入を得た。ルーブルや他の画廊で大家の模写をして過ごした。Pauline は Rue de Varenne にある 聖心 (Petit Hotel) で、ド・ケラン司教の肖像画を描くように頼まれ、これが、聖心の修道女たちとのかかわりをもつきっかけとなり、入会を願うようになった。友人とともにローマの美術館を訪ね、そこで絵の勉強を続け、絶えずトリニタの修道院を訪問し、マリアの子供の信心会に受け入れられた。Pauline はフランスにもどるが、母は我が子が修道生活で幸福を見出すことを理解できず、Pauline は、家族を離れることの痛みを味わった。1844年4月20日、Pauline は聖心会の志願者としてローマにもどり、マザー・ド・コロオリ (de Coriolis) によって会員として迎えられた。

トリニタ・デ・モンテの修道院には、回廊の一つにレクリエーションのために集まる習慣があった。修道女たちは、針仕事などを持って、院長を囲んで半円形に座った。院長が呼ばれて席を立ったとき、一人の修道女が「まあ、残念、マリア様が院長様の代わりになって、レクリエーションを導いてくださったらいいのに。」と言った。そのとき、突然 Pauline に Mater Admirabilis の姿が稲妻のようにひらめき浮かんだ。Pauline は、回廊のくぼんだアーチ型の半円を指しながら、「この回廊に私がマリア様の絵を描いてもいいでしょうか。」とおずおずと答えた。「ええ、いいですとも。」全員一致の答えだった。

フレスコ画の経験がなった Pauline だったが、イタリア人の職人が壁の準備を助け、色調は乾燥するにしたがい、薄くなるので濃く着色するように命じた。「大丈夫。マリアが私のモデルだし、私の理想です。彼女が助けてくれるでしょう。」と考えた。一日7, 8時間の仕事が始まった。志願者の仲間の一人でアメリカ人 Cornelia Conolly が Pauline を助け、おそらくモデルとしてポーズをとることをしたのではないかと考えられる。7月1日までに絵は完成したが、色調が余りにけばけばしく、院長から消し去るよう言われた。しかし、職人の忠告と援助もあり、Pauline は少しも心配せず、希望をもって絵を描き続け、次第に美しい色調が呈してきた。数週間が過ぎてまばゆい Mater が姿を現した。

1846年、絵は清めの祝日に祝別されることになっていたが、やむを得ず機会を逃し、その6ヶ月後10月20日にピオ9世がトリニタを初めて訪問され、この聖母を見たとき、「She is admirable! 賞賛すべき方！」言い、率直で慎み深い雰囲気と、美術がめったに表現しない年齢の聖母の様子に心深く打たれた。Mater Admirabilis という礼拝の名を与え、10月20日を祝日とすることを許可した。

1845年マザーバラは、Pauline に着衣の許可を与え、トリニタで式が行われた。式後、マザーバラとともにフランスに行き修練を受け、1847年パリで初誓願を立てた。彼女は生涯フランスで過ごし、ローマを訪れ、描いた絵を見ること

は二度となかった。**Mater Admirabilis** の絵がローマで一つの巡礼地になり、その足下で多くの魂をひきつけている報告がパリにも届いたが、**Pauline** にとって、自分がそこから離れていることが悔やみや嘆きにはならなかった。単純さと人の良さをもって人に接し、マリアの小さい僕として、遠く離れてとどまることに満足していた。**Pauline** は、パリで初聖体を受ける前の 80~90 人ほどの生徒を校長として導き、瑞々しい魂にキリストの土台を築き、次の時代を担う多くの女性をフランスに準備した。

Pauline は感ずべき御母の 50 年祭を祝うまで生きた。80 才が近づいた頃、一通の手紙に自分を次のように描いている。「私は、私の小さな生活が好きです。ちょっと苦しみ、少し編み物をし、それにイミタチオのある節を少しずつ読み味わいます。・・・そう、それからまだある事があります。それは、主が喜ばれることを愛すること、そして主の聖なる愛のあるいたずらも」。 **Pauline** の最期は 1895 年 10 月 5 日に訪れた。

*本文は、L. Keepel. **MATER ADMIRABILIS 1844-1944 SANDS & CO.LTD. LONDON** からの一部抜粋と要約による。

***Pauline** は、1860 年から 1883 年の間に 8 枚の **Mater Admirabilis** の絵を描いている。二つとして同じ絵を描くことはできないと分かっていた彼女は、色や背景、描かれている物を少しずつ変えて描いている。2020 年 5 月新たに 2 枚の絵が見つかった。
rscjinternational のホームページで画像を見ることができる。

<https://rscjinternational.org/news/mater-through-years-pauline-perdrau>

***Pauline Perdrau. Les Louisirs de L'Abbaye Rome, Maison Mere, 1934**
日本語版「大修道院の余暇」翻訳 JASH ボランティア翻訳グループ
Paulin が、いっしょに過ごしたマザーバラとの日常の思い出を綴った本